沖縄の旬な情報と人をご紹介するラジオ番組のフリーペーパー
paperRADIO

ハイサイ！ウチナ〜タイム！

Free
No,22
1月
2018

謹賀新年

【第296回】インタビュー
1月3日(水)　再放送6日(土)

護得久流民謡研究所会長

護得久栄昇

2017年正月に行われた沖縄のお笑い芸人No1を決めるテレビ番組に出演以来、沖縄で人気を呼びテレビ・ラジオを始めCM出演するなど今ノリに乗っているコントキャラ『護得久栄昇』。
その肩書きは護得久流民謡研究所会長。
沖縄では「あ〜そんな民謡研究所の師範いるよね」といったイメージをデフォルメして面白おかしく演じるキャラである。沖縄在住の方はもちろん沖縄民謡好きや沖縄民謡を習っている県外の方も「あるある」と思わず笑ってしまうマニアックな面白さがある。「わらるよね。」「チャメー！」「チンダミしようね」が今年の沖縄の流行語になる等話題に。子供からお年寄りまで大人気！

話題が話題を呼び、3ヶ月連続でリリースした楽曲は全て1位！（沖縄ちゅらサウンズ調べ）。そして東京のレコード会社『P-VINEレコード』からオファーが届くまでになり10月18日にフルアルバム「護得久栄昇大全」（全13曲）の発売。よなは徹の全面プロデュースで制作され、沖縄の新進奇才クリエイター「KUGANI」、東外門清順らが参加。アルバムワークには沖縄を代表する書家「豊平峰雲」が題字を担当。（沖縄県知事室にある屏風の文字を書いた方。）沖縄伝統芸能の舞台アナウスと言えばこの人「崎山律子」も参加するなど伝統芸能の世界でもアルバムが話題になっている。

ステレオ
護得久栄昇大全
護得久栄昇

ラジオの聞き方

毎週水曜 19:00〜20:00　再放送 毎週土曜 18:00〜19:00

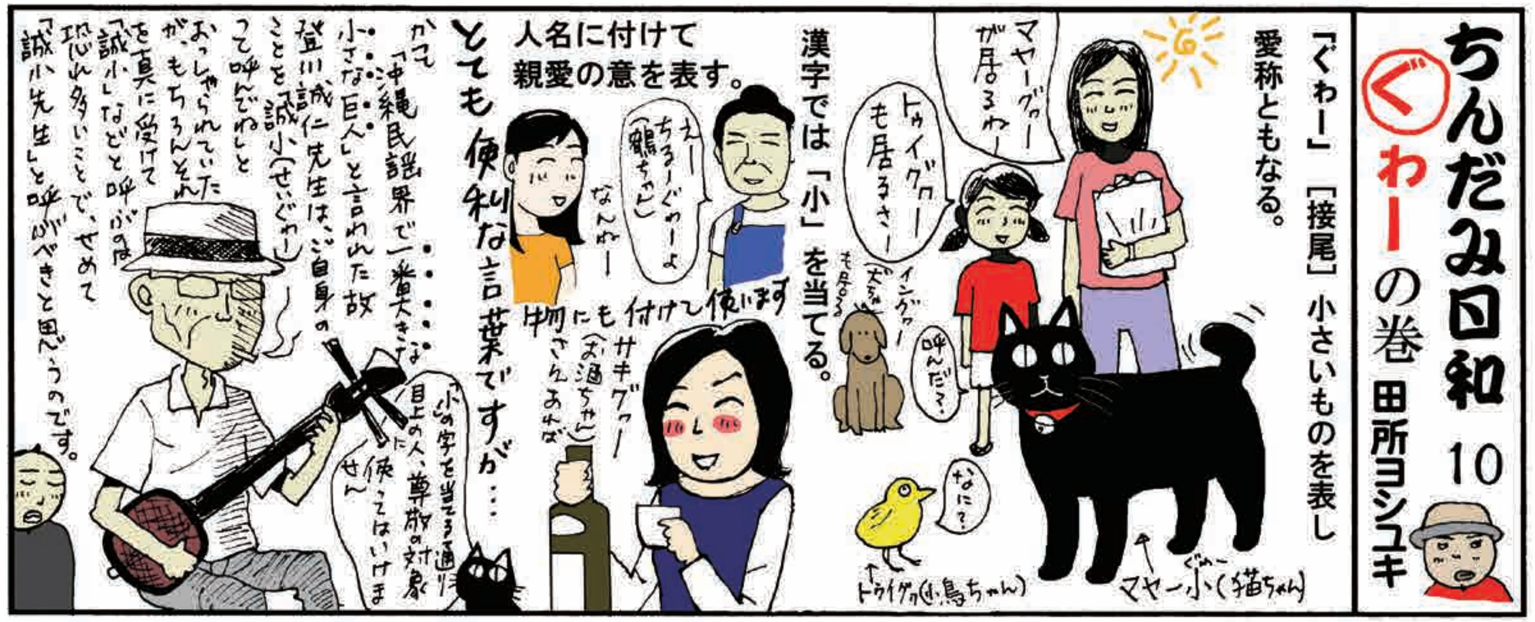
スマートフォンで聴く場合、アプリは不要！！
パソコンと同じURLをスマホからアクセスするだけで聴けます。
https://fm-odawara.com

ハイサイ！ウチナータイム！ **FMおだわら** で検索！

FMおだわら 78.7MHz
http://fm-odawara.com/

ちんだみ日和 10 ぐゎーの巻

田所ヨシユキ


「ぐゎー」［接尾］小さいものを表し愛称ともなる。
マヤーグヮーが居るわー
トゥイグヮーも居るさー
イングヮー（犬ちゃん）も居る
呼んだ？
なに？
マヤー小（ぐゎー）（猫ちゃん）
トゥイグヮ（小鳥ちゃん）
漢字では「小」を当てる。
人名に付けて親愛の意を表す。
えー ちるーぐゎーよ（鶴ちゃん）
なんねー
物にも付けて使います
サキグヮー（お酒ちゃん）
さんみあんな
とても便利な言葉ですが…
「小」の字を当てる通りに目上の人、尊敬の対象に使ってはいけません
かつて「沖縄民謡界で一番大きな小さな巨人」と言われた故登川誠仁先生は、ご自身のことを誠小（せいぐゎー）って呼んでねとおっしゃられていたが、もちろんそれを真に受けて「誠小」などと呼ぶのは恐れ多いことで、せめて「誠小先生」と呼ぶべきと思うのです。

BASKETBALL
PERFORMER
JJ

RPC エンタメ通信 vol.10

新年あけましておめでとうございます。皆さんの今年の目標はもう決まりましたか？昨年の私の目標は「挑戦」することを掲げ、様々なことに挑戦してきました。

ラジオ番組立ち上げ、当フリーペーパーへの連載もそうですが、もう数えたらキリがありません。その中でも昨年最後の挑戦となった世界大会KHOT2017への出場について、お伝えしたいと思います。前回発行されたNo.21も見てもらえたらフリースタイルの歴史やKHOTについてお分かりかと思います。大会は結果的にベスト32という中途半端な成績で終えました。しかし、ここでは伝えきれない様々な最高な経験と時間と学びを得ました。出場選手は私よりも年齢が1回り以上も違うプレイヤー達ばかり。その中で私が挑戦する姿を見せることで周りにいろいろな事を伝えることができたと現場で肌で実感しました。

この大会を通して感じた事で私が皆様へ何か伝えることがあるとしたら、それは年齢、立場、関係なく、挑戦することで成長し、道が開けるということ。何かを守るために何も挑戦しない奴が挑戦する奴を笑うことはできない。挑戦することで応援してくれる方々が出来て、感動を与えることができる。

もっと広い世界を見て悔いのない人生を送って頂きたいと思います。

僕が常に心にとめて大切にしている言葉がありますので、最後に紹介させて頂きたいと思います。

「人間には必ず来る。開けたことがないドアをノックしなければならない時が。ノックするには勇気がいる。怖いしね。この先はどうなるんだろうとか考える。だけど、そこで分かれるんだ。ノックする人間と、そうでない人間に。（矢沢永吉さんの言葉）」

僕は死ぬまでドアを叩き続けられる人間になれるよう今年も努力し続けます。そして、今年も読者の皆様そして当フリーペーパーを応援してくださるスポンサーの皆様にとって実り多き1年になりますようお祈りいたします。

今年もよろしくお願いいたします。

KHOT2017
世界花式篮球挑战赛
12/01

たるーの島唄コラム

第十回 旅するシマウタ

人が旅をすればウタもまた旅をする。ウタは旅により形を変えていく。その土地の人々の望む姿に。

はるか昔の1390年、琉球王朝が成立する前の話になる。戦乱が続く宮古島の平定を求めてある豪族が船に乗り那覇の港にやってきた。琉球の支配を仰ぐのが目的だった。中山（現在の首里や那覇）を支配した王の察度（さっと）は彼の面会に応じたが言葉が通じない。そこで豪族の配下の若者らに三年のあいだ沖縄の言葉を教えることにした。

来る日も来る日も言葉の勉強でストレスもたまり望郷の想いも募ったのだろう。若者は高台に登って海を眺めながら宮古島のウタ「あやぐ」を歌った。それは見事な歌声だったという。

その高台は若者の名前を取って現在では「タカマサイ公園」と名付けられて静かに海を見下ろしている。

そして話は沖縄の北部の今帰仁（なきじん）という村に飛ぶ。そこにはこんな話が今に伝わっている。

昔、首里の王府にご奉公を命ぜられた今帰仁の若者がある時宮古の若者が歌うウタ「あやぐ」を聞いた。あまりにも素晴らしかったので今帰仁に戻って真似て歌った。言葉がわからなかったので今帰仁の言葉で作った詞をつけた。それが「今帰仁ミャークニー」となって今に伝わっている、と。

そして私はその「今帰仁ミャークニー」の歌い手が現在いらっしゃらないか、とあちこち探していた。ついに去年お会いすることができた。もうお年は95歳で三線はできないがお元気でいらっしゃった。

その方にお願いして「今帰仁ミャークニー」を聞かせてもらった。なんと宮古島の「とーがにあやぐ」というウタによく似ているではないか。三線が二揚げという調弦も同じだ。その方も「宮古島のウタを聞いた今帰仁の青年が今帰仁で作った」と伝承を教えてくださった。

実は八重山の古いウタに、この宮古のウタが沖縄や八重山にも広がり流行っていることを称えたウタまである。そうなるとかなり実証性が高くなる。

宮古島から船で本島、首里にきた若者の望郷の思いで歌ったウタが、沖縄北部から来た青年の胸を打ったのは間違いない。それが、いつで誰だったか、そんなことはさほど重要ではなく、人の心を打つウタはどこまでも広がり、形を変えて人とともにあることが素晴らしい。

是非皆さんにも聴いて欲しいとYouTubeにもアップした。「今帰仁ミャークニー」で検索して欲しい。宮古島の「とーがにあやぐ」とも比較してもいい。そして那覇市内のタカマサイ公園にも是非！

最後になりましたが、今年2018年も「たるーの島唄コラム」もどうぞよろしくお願い致します。

たるー（関 洋）
宮崎県生まれ。広島在住。琉球民謡協会教師。ネットでおなじみの「たるーの島唄まじめな研究」の著者。島唄の訳と解説をして10年！広島で三線教室や「YOU 果報バンド」を主宰。

また、ヤールーが笑っている。

大城密

第4回 十六日

おおしろひそか 那覇市出身、東京都在住。「スマホ小説大賞 2014」にて『私アプリ』が角川ホラー文庫賞を受賞。「第２回ノベリスタ大賞にて『EGGMAN』が準大賞を受賞。2017年『下町アパートのふしぎ管理人』シリーズが角川文庫より刊行されている。

久しぶりに会う両親や兄たちや姉に、私は少し照れくささがあり、棒立ちになって頭を掻いた。正月に全員そろうなんて果たしていつぶりだろうか？

一歩歩くたびに床が軋む、木造の家の感触が懐かしい。

「おう、良く来たな。ここ空いているぞ。座れ」

手招きする父の表情は、私が記憶していたものと同じで安心した。

末っ子の私はいつも父親から遠くの席に座っていたが、今日は珍しく父親の横に座ることになった。

私は再会の言葉を言う間を失ったまま、座布団の上に腰を下ろした。

子供の頃、あれほど大きく感じていた一枚板の食卓は、それほどでもなく、家族や親戚で囲めば、窮屈さすら感じた。

正月だというのに、食卓の上にはまだ料理の一つも並んでいない。

一番上の兄が、「どうだった？」と聞いてきたので、私は「まぁよかったよ」と返した。

兄は「そうだろうな。俺はお前が羨ましいよ」と私の肩をたたいた。

「爺ちゃんと婆ちゃんは？」

私は姿の見えない祖父母を探した。

「あの二人は忙しいからな、他の家に顔を出しているところだ。まぁそのうち帰って来るだろう」

「そっか」

私は楽しみを後回しにされた気分だったが、それも仕方ない。時間は十分にある。ゆっくり待つのもいいだろう。

それから私は家族にこれまでのいろいろなことを聞かれた。私はその一つ一つに記憶のある限り丁寧に答えた。

そのうち、話の内容は私が幼かったころへと移っていった。

「あんたは兄弟一、泣き虫だった」

母が優しく微笑む。

「海で沖に流されたとき、俺が泳いで助けたのを覚えているか？」

二番目の兄が水を掻くように両腕を回した。

「全然おねしょが直らなくて、私が一緒に隠してあげたの忘れてるでしょう？」

姉が両手で口を押さえながら笑っている。

確かに、言われてみればどれも記憶がある。

過去の話をする相手もいなくなってしまい、どれも記憶の底で、じっと沈んだままのものだった。

「懐かしいな」私は肩を揺らして笑う。

ふと視線を感じて顔を上げると、母の膝の上に見知らぬ赤ん坊が座っている。

どうして私は今までその存在に気付かなかったのだろうか？

「その子は？」

私はほとんど黒目しかない、赤ん坊と見つめ合う形になった。

「あなたの娘よ。まさか忘れたの？」

母はそう言って、赤ん坊の柔らかな髪の毛を撫でた。

「俺の……。――ああ、そうか」

すぐに理解した。

私は自分の目に熱い涙が浮かぶの感じ、我慢せずそれを流した。

「先に行ってもいいと私が何回も言ったんだけど、あなたたちに会ってからって、この子がきかなくてね……」

それは長い間悪いことをしてしまった。

母は私へ娘を渡してくれた。

抱きかかえ、初めての体温を感じながら、娘の名前を呼んだ。

呼ばれた娘は小さな声で笑い、小さな手でしっかりと私の指を掴んだ。

私の涙が娘の赤い頬に点々と落ちた。

妻が来るまではもうしばらくかかるだろうが、私はそのときがくるまで娘をずっと抱いていようと決めた。

――ふいに鼻腔がむず痒くなった。

誰かが線香を上げているのだろう。どこからともなく、居間に煙が漂った。

その煙は徐々に居間中に広がった。

遠くから何人もの声が聞こえる。

どれも私にとってそう懐かしくはない声だ。

賑々しい声は、差し込んでくる太陽の光とともに家中を覆う。

「来た来た」

母と姉が席を立ち、玄関の方へと歩いていった。

廊下の床板が軋む音がここまで聞こえた。

しばらくして戻って来た二人の手には、料理が詰まった重箱。そして果物とお茶。さらには待ちかねた酒があった。

すぐに料理が食卓に並ぶ

重箱に詰められた料理の数々は、久しぶりに食べる妻の手料理でもあった。

私は珍しく腹が鳴るのを感じた。

「さあ、始めようか」

父が私に酒を注いでくれた。それは私にとって初めてのことだった。

私は片手に娘を抱いたまま、グラスを手に取った。

線香の煙は再び増え続けている。甚く心地が良い。

――私は今年初めて『グソーの正月』を過ごす。

「グソー」とは沖縄の方言で後生を意味する。

それは旧暦で一月十六日に行われる。

つまり、『十六日』とはあの世の正月のことである。

毎月 沖縄をテーマとした3分で読める
読み切り超短編小説シリーズを掲載！
次回は『カーサームーチー』。お楽しみに！